

【研究ノート】

労働概念の歴史
——古典古代から宗教改革まで——

酒巻 秀明*

ドイツの歴史学者ヴェルナー・コンツェによると、労働という言葉には、二つの意味があった。受動的な苦役という意味と、能動的な努力という意味である。コンツェは、始めは、受動的な意味が優勢であったが、中世以降は目的のための努力という能動的な意味が一般的になったと考えている。本稿では、そのような労働概念の歴史を古代ギリシャから宗教改革までたどっていく。

古代ギリシャの哲学者たちは、労働を軽視していた。労働は、自由な市民にふさわしくないと考えたからである。しかし、ローマ時代になると、苦役を通じて目的に達するという労働観が現れてきた。

他方、古代キリスト教では、ギリシャ的な考え方を受け入れつつも、神の前での労働の平等という考え方が生まれてきた。神への祈りを込めた労働に上下はないとされたのである。中世キリスト教になると、ギリシャ哲学の再発見を通じて、世俗の労働を軽視する考え方もあったが、宗教改革期になると、神の前での労働の平等という考え方が再び強まり、同時に、労働をしないことは悪習と考えられるようになっていった。

コンツェによると、ギリシャローマ的な労働観やキリスト教的な労働観は、その後も形を変えながら影響を与え続けていくことになる。

キーワード：労働、ギリシャ哲学、キリスト教

1 はじめに

最近、労働に対する考え方も多様になっている。以前なら、職場で汗を流す人は称賛の対象であったが、現在でも支持する人がいる一方、必ずしも理想の働き方とはされていない。確かに、必要以上に長い労働時間は、法律上許されるものではなく、その点では改善が必要であろう。しかし、給料の面でも、職場での労働は、前ほど高く評価されなくなっている。例えば、経営者と職場で働く人の格差は拡大しており、辞任に追い込まれた経営者でもとんでもない額を手にするのに対し、一般の従業員の年収は減少傾向を続けている。

周知のことではあるが、労働の持つ価値や意味は、現代だけでなく、歴史的にも大きく変化してきた。労働の意味が多様化している時代に、労働の概念のこのような歴史的な変化を確認しておくことは、意味のあることだと思われる。そこで今回は、古代ギリシャの時代から宗教改革の時期までの古典的な時代の労働概念の変遷について、簡単にたどってみたい。ただし、対象が広

* 本学現代教養学部非常勤講師

範囲にわたるので、基本的に、ドイツの社会史家ヴェルナー・コンツェの整理に従って検討することとする¹⁾。

コンツェによると、労働という言葉は、ドイツ語でも、古典古代やヨーロッパの対応する言葉でも、概念上は複数の意味をもっていたという。元から優勢であったのは、手を使った作業で努力する中での「苦勞」、「苦痛」、「負担」という受動的な意味であったが、早くから、少なくとも中世盛期には、目的のために、肯定され、求められた努力という能動的な意味が登場するとしている(Conze: 154)。コンツェは、18世紀になると、近代的な労働観が現れるとしているが、このような基本的な意味は、その後も影響を残すことになる。従って、以下では、労働という言葉の、この基本的な意味の発展した時代について検討していくことになる。

2 ギリシャローマ時代の理解

コンツェによると、ギリシャ時代初期のホーマー的な貴族の世界では、戦闘する貴族は全体として品位があるとは見なされていなかったという。しかし、ヘシオドスでは、自由民の農作業は、人間にとっての神的な使命として高く評価されている。そこでは、労働することではなくて、怠惰の方が不名誉と考えられていたという(Conze: 155)。

ところが、コンツェによると、社会秩序が、貨幣経済、都市経済、交易を通じて変化するのに応じて、そのような考え方は支持を失い、労働は、肉体労働として、正式な市民身分の下位にいる下層の人や奴隷に割り当てられ、価値を下げられてしまったという(Conze: 155)。クセノフォンではまだ、農業労働についての以前の評価を含むような表現が見られるが、プラトンは、農民を奉仕する階級に分類し、アリストテレスは、農民を、手工業者、商人、賃金労働者と同じレベルに置いている。手工業者や賃金労働者の評価を下げることは、それより早い時期のことであり、ギリシャの外の部族と同じであったという。プラトンは、怠惰には反対しているが、肉体的に働いている人々の生活様式は、彼にとって市民的な美德とは一致しないものだった。アリストテレスによると、美德を持つものだけが市民であることができたのである²⁾。古典的な政治的視点によると、市民社会の土台にあるのは、ポリスに対し役に立つことだったという。そして、労働ではなく、ふさわしい行動が市民の特徴となるものになった。そのため、片方で労働と市民の美德が、また他方、労働と教養が対置されていた。さらに、三つ目の対立概念として、避けることのできないと考えられていた仕事の目標や目的としての余暇が付け加わったという。

コンツェは、労働が下位に置かれていたことは、アリストテレスの人間の活動の分類の中で、特にはっきりと現れていると見ている(Conze: 155)。上位の概念は、活動そのもの、または、活動していることで、それは、実践(プラクシス)か制作(ポイエーシス)という形で現れる。この違いは、活動の異なった目的に根拠があるとされている。外的な対象に向けられて、対象から切り離された仕事を結果として持ち、その限りで労働の性格を帯びるのか、あるいは、人間世界、ポリスの内部で活動しながら、これを仕事として維持するために、常に行われなければならないものかという違いである。その際、善い、すなわち、徳のある幸せな生活のためにまとまった人々の、統治や任務に必要なことすべてである、実践の持続的な活動は、制作の労働の上位に置かれていたという。古典的な政治的な見方によると、「芸術」へと高められた形での労働も、

常に、それを利用することを知っている者よりも下に置かれていたのである。倫理的・政治的活動である実践は、労働である制作を支配していて、賢い活動は、支配者の知識であり、すべての人というわけではなく、ただ、家長と政治家にのみふさわしいものとされていたのである。

コンツェによると、ポイエーシスとプラクシスの違いは、後の時代の「芸術」と「仕事」の区別の基礎になっているという (Conze: 156)。この違いは、近代の始まりを越えるぐらいまで人間の活動の序列を規定したという。そして、この秩序に含まれるのが、芸術と仕事の、狭い意味での労働、すなわち、体力の使用を基にした活動からの、さらなる分離である。しかし、コンツェによると、この分離は、近代の、肉体労働と精神労働の対置と同じものではないという (Conze: 156)。というのは、芸術と仕事の際の活動の形式は、労働ではなく、知識として理解されていたからだという。芸術と仕事は労働、すなわち身体的な奉仕や手助けを「行為の道具」として前提にしていたが、それ自身は労働ではないとされていたのである。

その後、古代後期のキュニク学派やストア学派では、重荷という労働の性質の、評価変更が行われていたという。コンツェによると、キュニク学派では、労働は美德の手段とされ、また、ストア学派は「勤勉」や「労働への愛」という言葉を作り出していたという (Conze: 156)。しかし、中期のストア学派は、労働の軽視、とりわけ、手を使う労働の軽視へと戻ることになった。このことは、古典的には、キケロの場合にはっきりしているという。キケロは、自由で、高貴な技能を、自由ではない、卑しい、軽蔑すべきものと区別している。コンツェの見解によれば、キケロは、理由づけの中で、古典的な、政治的視点に従っているという (Conze: 156)。建築、医療、農業、学問といったリベラルアーツは、自由な人間の美德を基礎にしている、その目的は、持続的な効用、または、名誉であって、単なる必要や一過性の享樂ではないということになる。このようなものに配慮するのは、魚屋、肉屋、調理人、鳥商人、漁師などということになる。自由な仕事には報酬が、自由でない仕事には労賃が与えられるのである。

ただ、ローマでは農民的な伝統に従って、自由な男性の農耕は軽視される労働から除外されていた。そして、その証拠となるものがラテン語の文学の中に存在しているという。コンツェによると、その中で後の時代まで大きな影響を与えたのは、ウェルギリウスの耕作の技術 (ars colendi) と人間の労働に結びついたすべての「技能」の始まりについての物語 (「農耕詩」) だという (Conze: 157)。その物語の神話的な背景は、苦勞や体を動かす活動としての労働がまだなかった「黄金時代」の終わりについてである。最高神ジュピターは、それまで平穏で、食物を提供してくれていた自然を変えてしまい、人間に欠乏や困難により、活動するよう強制したというものである。コンツェによると、ここで、ウェルギリウスは、人間の労働の自然に対する勝利を語っているわけではなく、すべての物事の中で、善からぬ力として作用しながら活動を要求する、困難と欠乏により労働が強制されるようになったことを述べている (Conze: 157)。それにもかかわらず、ウェルギリウス以降、労働の勝利という言葉は、様々なところで語られるようになり、慣用表現として、ヨーロッパ貴族の美德や労働倫理に影響を与えることとなった。この意味の変化、あるいは、始めからの相反する理解が生じた原因は、コンツェによると、ここで使われていたラテン語の labor という言葉が、紀元前一世紀以降、二重の意味を持っていたことで説明されるという (Conze: 157)。確かに、ラテン語の辞書を見ると、labor には、労働と困難という二つの意味が載っている。しかし、キケロになると、labor の苦痛の部分が強調されるよう

になるという。苦勞の多い、努力の目標へ向けられた活動の意味を獲得することで、この言葉は、徳と結びつくようになり、高く評価されていた勤勉と近いものとなり、ローマ人にとって追求する価値のあるものとなったと、コンツェは言っている (Conze: 157)。ローマ人は、活動性と果敢さを示すことで名誉を得ようとしたのだという。

労働の概念が、身分の低い奴隷労働や手を使った労働から分離した影響は、中世にまで及び、キリスト教的な労働の伝統とつながっていったとコンツェは考えている (Conze: 158)。そこで、次にキリスト教的な伝統へ目を転じよう。

3 ユダヤ、キリスト教的な伝統

コンツェによると、この段階で、初期キリスト教的な労働観は、古典古代の労働観と混ざり合っていて、古典古代の考え方（労働＝労苦）を認めているように見えるが、実際には、根本から見直しているという (Conze: 158)。そこから生じる緊張関係は、キリスト教的なヨーロッパを規定するもので、近代の革命の時代にまで続いているという。ここで、ギリシャ神話の「黄金時代」に対応するのは、「エデンの園」になる。神は、創造主として自分の労働を終えた後に、人間を、耕させ、保護させるため「エデンの園」に置いたのである。すると、労働は、創造主とした働いた神の、創造の仕事が続けろという、人間に与えた「使命」なのである。従って、人間の創造とともに、労働も与えられたのである。そして、コンツェによると、その点についてキリスト教的な伝統では、常に価値が置かれてきたという (Conze: 158)。特に、中世後期の托鉢修道士の説教では、しばしば、そのことが、社会批判的な、とりわけ、貴族批判的な論調で語られていたという。そして、人間の神に反する、罪のある行動の結果による楽園からの追放と耕作に関する神の罰とともに、労働は「労苦」となり、ギリシャ的な労働とつながることができるのである。しかし、神の罰は、労働の行われるべき条件にあったという。もし労働が、苦勞にもかかわらず、あるいは苦勞の故に、神への奉仕として成されたのなら、神の「加護」がその上に置かれるというものであった。それ故、コンツェによると、旧約聖書以来、ギリシャのような肉体的労働の軽視は、原則的に不可能となり、生活の実践の中では少なくとも弱められていたのである (Conze: 158)。

新約聖書の福音書や使徒の手紙は、このようなユダヤ的な伝統の上にあると考えられるという。その主題は、コンツェによると、労働そのものではなく、人間の存在の本来的な意味に従属した、あるいは、組み込まれた労働であったという (Conze: 158)。労働は、生活の維持に役立つから必要なだけでなく、神の前での人格としての人間の質と切り離すことはできないもので、悪習や怠惰を遠ざけるのに価値のあるものとされていた。労働は、身分の違いなく、すべての人にとって欠かすことのできないものなのであった。コンツェによると、労働は、単に生活維持や物質的な利益のためではなく、神のために、それで、また、「隣人」のために、教団のために、心から行われるべきものであった (Conze: 158)。それ故、聖職者や、宣教師の活動も労働と見なされていたという。使途の役職は、単に生活を維持するための労働より重要なものだった。しかし、両者とも、召命による神や人間への奉仕として、義務として理解された、労苦や厳しい「奴隷の労働」の意味での労働を意味していたのである。労働は、そのような評価からすると、価値の高

いものと低いものに分けることはできず、より立派かどうかに分けられていた。コンツェによると、神の前での人間の平等は、活動の評価の高低による一般的な社会的な順位づけの上に置かれていたのである (Conze: 159)。

すると、すべての労働は、キリスト教的兄弟愛の精神で祈りとともに行われる限りで、生命の充実となる。労働は、その価値において、ある地位やその名誉と結びつくものではなく、そのことから実践において、奴隷の労働は、それが、ヘレニズム、ローマ的な世界でどのような敬意を受けていたかに関係なく、キリスト者の奉仕へと高められ、尊重される結果となったのである。つまり、キリストの教団に所属していることが、主人と奴隷の違いを無効にするというのである。例えば、アウグスティヌスは、修道士にも、手を使った仕事の価値を説いて、手を使った仕事に労働の栄誉を与えているという。彼は、労働の義務と、神の前でのすべての全うな労働の承認を強調し、人間は、自己の存在に則した、独自の労働を通じて神の仕事に関与するとしている。従って、アウグスティヌスの場合、労働が神への奉仕として、誠実に、利益の追求なしに行われている限り、すべての労働の、神の前での平等が強く強調されることとなる。コンツェは、この点で、キリスト教の労働概念は、他の点では、古典的、ヘレニズム的な労働概念と妥協してつながりながら、この点では意識的に対立しつつ、影響を持ち続けたとしている (Conze: 159)。

他方、キリスト教 (ユダヤ教) 的な、「労働」に対する補完概念は、「安息」で、これは単に「完全な休息」だけでなく、神への、誰にも邪魔をされない集中を可能にするものだという。そのため、労働には制限があり、固有の価値を持つものではなかったともコンツェは言っている (Conze: 159)。労働の日は、「神聖な」、労働をしない祝日で規則的に中断される場合のみ、意味を持っていたという。キリスト教の「安息」は、ローマ人の「余暇」と同じものではなかった。キリスト教的な、「労働」の反対概念は、「怠惰」で、すでにパウロが、怠惰に対し労働への戒めを与えている。コンツェによると、労働と怠惰という対立する組み合わせは、そのまま続いて伝えられていくことになるのである (Conze: 160)。

マックス・ヴェーバーは、新約聖書の中で、労働に何か新しい価値が付け加えられたとする考えを「童話」と評しているが、コンツェによると、ヴェーバーは、この無愛想な文章で、近代的な誤解を拒絶しているという (Conze: 160)。実際、イエス、使徒、教父の誰もが、近代の理想主義的な転換と置き換えできるような、労働のそれ自身の価値について問題にはしていないという。しかしながら、コンツェは、社会的に制限された古典古代の労働概念の、根本的に別のキリスト教的な関係づけのシステムによる解消を、過小評価してはいけないと考えている (Conze: 160)。キリスト教的な労働概念は、根本的にギリシャのものとは異なっていて、広く影響を与えるような一貫性を含んでいるからであるという。ただ、さしあたっては、ギリシャ、ローマ的な労働の評価も続いていたので、上記の緊張関係が生じていたが、政治社会的な現実の場では、「世俗的」な妥協を通じて覆い隠されていたのだという。

しかし、「祈りからの労働」の意味での、また「神への信仰からの奉仕」というキリスト教的な労働概念は、何度もこの覆いの下から抜け出し、とりわけ、「祈りと労働」というベネディクト派からフランシスコ派に至るまでの修道士の規則に現れているという。コンツェは、これにより、「俗世」の中でのあらゆる労働の事実に評価の上昇であれ、修道士のような「俗世」からの禁欲的な離反であれ、労働を通じて神の前での功績を得るという考えとのつながりにおいてで

あれ、一般の意識の中で、身分に結びついた労働の評価を越える決定的な歩みが達成されたとしている (Conze: 160). そのような読み替えや逸脱は、新訳聖書的な、初期キリスト教的な、「奉仕」という労働の性格が基礎にあるという。そして、このような労働の性格は、特別なキリスト教的な労働として、社会奉仕活動における隣人愛の実践として、初期キリスト教から現代まで保たれているといえるのである。

4 中世盛期における「労働」

コンツェによると、ドイツの「労働」という言葉の歴史の中で、中世には、始めからあった受け身の意味が前面に出ているという (Conze: 160). 中世中期的、キリスト教的な美德の倫理の形成が、騎士や、司祭、乃至は、修道士という身分の中で見られている。それは、「暇な時間」を取り除くことで、それぞれの身分に見合った「労働」を求めるというものである。例えば、修道士の「従順の労働」は、修道士の祈りや宗教的禁欲的な修行の中で、また、貧しい人や病人に対する慈善的な活動の中で生じていたという。同様のことは、騎士が、名誉や愛を得るために、積極的に、無条件に引き受けなければならない苦労や苦痛で、それは、12, 13 世紀の詩人の描く「騎士の労働」にも見うけられるという。コンツェによると、「労働」は、この時代では、また、「勤め」でもあるという (Conze: 161). 純粹に世俗的には女性への勤めだが、さらに、女性や男性への、また、神への勤め (礼拝) でもあった。そのように理解すると、労働は、究極的には、スコラ学派の最高善である、神に関係づけられたままであったことになる。例え、戦いの勤め、女性への勤めにおける騎士の「労働」が、実際には、キリスト教的には、ほとんど根拠のない、「世俗」への献身と同じだったにしても、貴族的騎士的な意味での労働を通じて、内面的な品格が獲得され、「美德」が実現されるとされたのだった。しかし、コンツェによると、労働そのものは、品格を持つものではなく、一つの「美德」でもなかった (Conze: 161). むしろ、労働は、以前と同様、苦労と苦痛であったという。しかし、騎士がまさしく求める必要のあった、労働の中の証明が、品格や名声、名誉をもたらしたのである。騎士が、彼の身分にふさわしい労働から逃げたなら、彼は名誉を失ってしまう。手を使った労働は、彼の品格に値しない。疑いのないことは、上記の labor の意味が、この「労働」の考え方の中に入り込んでいるということだという。しかし、そのような騎士の労働において、労苦の受動的な忍耐から、活動的で、苦労の多い活動への意味の移行が明らかに始まっているとも言えるのである。それに対し、残りの一般の身分では、それに比較できるような、肉体的で手を使った労働の再評価へと向かわなければいけないはずの、「労働」の美德の倫理は持っていないか、または、もっと後になって発展させたという。ただ、コンツェによると、活動的で、肯定的な意味での労働が、騎士の身分だけに限定されたままではなく、中世後期には、市民の意識と結びついたことは、疑いはないという (Conze: 161).

他方、スコラ学派に一般的に妥当するのは、労働は、生活を維持するための手段のない人にとっての義務であって、普遍的な義務ではないということだった。トマス・アクィナスは、必要性が肉体労働へと強制するとはっきりと言っているという。さらに、教会の教説は、肉体的労働の制限を求めている。コンツェによると、ここでは、ギリシャ哲学 (アリストテレス) の影響が、再び、強く感じられるようになっている (Conze: 162). 「冥想的な」生活が上位に置かれ、「活

動的な」生活が軽蔑されているのである。トマスの主張によると、肉体的労働の要請は、一般に義務づけられている訳ではない。それにより、司祭や、騎士の、狭い意味での労働からの開放が正当性を認められるのである。コンツェによると、トマスは、アリストテレスの政治学と、領主の家という彼の出自から義務づけられていた、当時の政治的、社会的序列を受け入れることで、急進的な労働の概念とは遠ざかってしまったのである（Conze: 162）。

しかし、聖職者や貴族の労働が、職人や農民のものより上位にあるとしても、新たに受け入れられたギリシャの哲学は、これらの層の肉体的労働が、軽蔑されるというところまで影響する程の力はなかったという。労働のキリスト教的な評価は保持され、とりわけ、托鉢修道士たちの間では、再び、強く広まっていたのである。しかし、労働の「有用性」が労働の価値を決めるとしても、労働する生活には、それでも聖職者の生活よりも低い順位しか与えられていない。例えば、マイスター・エックハルトは、ただ役に立つだけの労働をする生活との違いを強調しながら、聖職者の生活を高貴と表しているという。その結果、コンツェによると、宗教者が、他の人々より高く位置づけられる状態は、まだ続いていたのである（Conze: 162）。宗教者は、労働しなくても、被造物の生活の苦勞を免除されているとされていた。しかし、コンツェによると、そのような考えは、それでも、中世後期に、とりわけ、都市における市民的な職人の労働が高く評価されたり、それにより、召命³⁾についての宗教改革的な教えが広まるのを妨げることはなかったとしている（Conze: 163）。

5 宗教改革

コンツェによると、宗教改革の教説の基礎にあるのは、新約聖書の労働概念であるという。この考え方が、単に何度も急進的に利用されることで、キリスト教的な労働概念の持つ可能性は高められていったのだという（Conze: 163）。キリスト教的な従順の中で行われる、すべての労働の価値の平等は、本気で実行されるべきものとなったのである。そして、宗教的な労働は、優位を否定されるか、逆に、無為という烙印を押されることとなってしまった。

農民や職人の大変な労働は、すでにルター以前に神への奉仕と解釈され、祈りと同じものと見られていたという。コンツェによると、ルターは、飽くことなく、この考えを何度も繰り返したのだという（Conze: 163）。そして、活動的な生活は、もはや冥想的な生活の下位に置かれることはなくなったのである。労働の価値の尺度となるのは、ただ、それがどれほど信心深く行われたかであって、それに対し、労働が、人に対してどのような意味があるかとか、どれほど利益をもたらすかでもなく、また、神の前での功績としての「善き業」の意味からでもなくなった。すると、生計を立てるために、働くことを強制されていない金持ちすらも、労働しなければならないことになった。何故なら、労働は、身分の違いにかかわらず、すべての者にとっての神の戒律になるからである。コンツェによると、キリスト者は労働し、後のことは神に任せるのである。神と隣人のための労働は、キリスト者を、地上における神の意志の協力者であり、執行者とするのである（Conze: 163）。ただし、そのことから明らかとなるのは、ルターが、労働を「労働のために」評価していないということだという。それ故、コンツェはこの点に関して、しばしば、プロテスタントの労働教説をさらに発展させ、読み替えている、近代の労働の評価を前提にした見

解は、誤解であるとしている (Conze: 163-4).

カルヴァンの労働についての見解は、ルターに近いもので、労働の成功が選ばれた証という信仰 (予定説) と結びつけられている。しかし、コンツェは、この見解を、後のピューリタンの立場から解釈すべきでないし、また、関係があるとしても部分的だとしている。確かに、急進的キリスト教的で、その点で、新しい労働の理解のもたらした影響は、広範囲に渡っている。しかし、その際、どの程度まで宗教改革の結果を重視するのか、それとも、政治経済的な目的のための、宗教改革的、プロテスタント的な考え方の採用を問題にするのかは、別の問題として考えることが必要だと、コンツェは強調している (Conze: 164).

コンツェの整理によると、そのような広範囲にわたる帰結は、神学的に基礎付けられた宗教改革の見解それ自身のものを除いても、以下のようなことがあるという (Conze: 164).

a) 社会的な経験を通じて裏づけられた、修道士や聖職者は働かず、怠け者で役立たずだという議論による、聖職者、宗教者身分における冥想的生活の価値の否定。労働の戒律から来るこの批判が貴族に拡大されると、すでに、その後の、特権的で寄生虫的な身分と、役に立つ働く身分という革命での対立の前触れとなっている。

b) 「上の人」の無為に対する断罪は、「下の人」の労働嫌い、とりわけ、乞食に対する戦いと呼応している。それは、聖職者や貴族の怠惰の拒否を通じてと同様に、労働概念の価値の上昇と結びつくことになる。怠惰のみが、以前よりも徹底して非難すべきものと受け止められるだけではなく、物乞いについての、喜捨を受け取る「自分からなった貧者」(托鉢修道士) や喜捨を与える、神の御心にかなう功績のある金持ちに対する教会の高い評価も、これ以降プロテスタント的な地域では、非難されるものとなるのである。他者の寄付で生活する、キリスト教的な貧困が廃止され、乞食が、非道德的な、排除されるべき現象と見なされるようになると、そこから、労働は罰であり、しつけや教育となり、それ故、当局による強制が可能になったのだという。それに対応するのが、16世紀以来、カルヴァン主義の国々、特に、オランダから広がった、労働収容所や刑務所であるという⁴⁾。

c) 新しい、急進的でキリスト教的な労働の評価から、労働社会への傾向が現れて来た。ここでは、原則的に、病気によるか、或いは、子供と年寄りの時期を除いて、積極的な活動と厳しい苦労という二つの意味での労働からの、倫理的な基礎付けによる免除は無くなってしまった。このことは、キリスト教徒という共通の身分を、共通な労働の義務へと関係づけることを意味していたという。そして、そのようにして、世界における、神の前での普遍的な平等を実現させることを意味するようになった。

ただし、コンツェによると、当時、キリスト教的な労働概念から、社会での出世や社会での移動を求める努力を、また、社会的変化のプログラムや社会的変革を引き出すことはできなかったもので、そのような平等からは、社会革命的な平等化の動きが生じないだけでなく、身分的な秩序は妨げられずに、却って、キリスト教的に根拠付けられた領邦国家を通じて、新たに、正当化され、保持されてしまったという (Conze: 165)。従って、「キリスト教徒の身分」における、労働の平等な順位づけや平等な名誉を強調することは、決して、政治や経済の実践の場で、それぞれ身分的に制限された「名誉」によって区別されている、多くの労働を解体することを、意味してはいなかったという。

コンツェによると、16世紀から18世紀の口語でも、「労働」という言葉は、決して、集中した、目標に向けた活動の意味で、人間の活動すべてに、同じように使われたわけではないという(Conze: 165)。「苦勞」や「苦痛」を意味する段階が、まだ続いていたのだという。そして、それは、「労働する」という動詞でも同様で、「活動的に行う」という意味は、ドイツ語圏内の広い範囲、特に、南部では最近まで受け入れられていなかったという。「労働者」という言葉の歴史、また、意味の歴史も、「苦勞と労働」という元々の意味に応じたものだという。コンツェによると、「苦勞する」より「作業する」を普通とするような労働概念が、一般に日常の言葉として採用されるまでに長引いたことは、示唆に富んでいて、注目する必要があるという。そのことは、18世紀以降の、キリスト教的労働概念の影響が弱まり、近代的な労働概念への変化が、ますます一般の意識の中に広がっていく時代についても当てはまるという(Conze: 165)。

さらに、コンツェは、マックス・ヴェーバーに関係した誤った解釈に対して、キリスト教的な労働概念は、プロテスタントの新たな価値づけによって近代化されたのではなく、旧約聖書と新約聖書への直接的な回帰によって再び確立したものだということを確認するべきだと主張している(Conze: 166)。確かに、近代的な経済の動き(「資本主義」)は、プロテスタント的な労働の概念によって容易にされたり、可能にされてはいるが、決して引き起こされたのではないという。コンツェは、ヴェルナー・エレルトの、「ルターやルターの後継者たちは経済に敵対的ではなく、むしろ、利子を取ることや、売ったり買ったりすることを、有益であり、当たり前であり、理性的だと見なしている」という主張に対し、ルター自身の、商業は、略奪や盗みだという考えを対置している(Conze: 166)。何故なら、商業の中には、必然的に利益のための利益の追求が避けられず、制限が難しいので、ただ必要を賄うだけの経済からの「危険な」飛躍が含まれるからである。ルター的な特徴を持ったキリスト教的な労働の概念は、財貨を得る労働を認め、さらに、可能ならば、人間が労働を通じて十分で豊かな生活を送ることを認めていたが、その点に生活の意義を見たり、ましてや、資本や経済力の蓄積や拡大の追求を見たりすることは、認めていないという。ルター的なキリスト教の労働概念には、世俗的な所有に対しての満足が含まれていて、「心」は、世俗的な所有に執着すべきではないとされていた。しかし、近代的な利益社会では、純粋な満足はもはや存在しない。というのは、それは、停滞や後退を引き起こすからである。そうすると、キリスト教的な労働から近代的な「資本主義」へと渡る架け橋はないことになる。コンツェは、近代的な労働世界は、非キリスト教的で、中心においては反キリスト教的であったという(Conze: 166)。しかし、そのことは、近代的労働世界の発生期には隠すことが望まれたのだとしている。というのは、政治的社会的な実践の中では、プロテスタントの労働倫理から近代的な労働の評価への別のスムーズな通路が十分に存在していたからだという。

コンツェによると、同様のことは、カルヴァン派や改革派教会についても強調されるべきだという(Conze: 166)。確かに、カルヴァン派の、ルター派よりも強い禁欲的労働への傾向は、実際に、個人的な禁欲を続けることで、利益の蓄積へとつながり、予定説が、「現世」における労働の成功へのより高い評価につながったのだと言うことができるかもしれない。しかし、それは、予定説が可能にしたということであって、直接的な原因であることを意味してはいないという。それは、カルヴァンの教義や労働観の中に直接的な根拠の存在しない、望まれず生じた結果だっ

たと、コンツェは考えている (Conze: 166)。ただ、明らかに、先に確認された、キリスト教徒の共通の身分から、「召命」としての労働を通じた一般的な生活の充実への関係は、カルヴァン派においての方がルター派の場合よりも情熱的に、首尾一貫して展開されているという。ただし、コンツェによると、この点は、ドイツに関しては、重要ではなかったという。というのは、ドイツの「労働」概念史にとっては、「近代的な」影響とのつながりは増してはいたけれど、18世紀の終わりまで、片方でカトリックが、またもう片方では、ルター派が、まず第一に、基準であり続けたからだという (Conze: 166)。

6 18世紀以降の展望

最後に、18世紀以降の展望について触れておこう。コンツェは、17, 18世紀のヨーロッパで「モデルネ」を勃興させた条件や力の影響関係の中で、「労働」は、以前の名残であれ、取り入れられたものであれ、古典古代の伝統的な見解においても、キリスト教的な伝統的な見解においても、根底から揺さぶられることになるとしている (Conze: 167)。この二つの概念の流れ、特にキリスト教的なものは、この後も長く影響を残し、近代的な思考に適応したり、或いは、対置させられたりすることになる。しかし、コンツェによると、「労働」のキリスト教的な特徴や評価が、強制力の一部を失うにつれ、ヨーロッパの都市で中世中期以来事実上存在していた「世俗世界」での目標、計画、成功への実績という労働の「市民的な」評価が、遠慮なしに前に現れ、語られるようになり、概念化されることになるのである (Conze: 167)。

ただ、これ以降の問題については、さらなる検討が必要となるので、次回以降の課題とさせていきたい。

[注]

- 1) また、清水 (1982)、今村 (1998)、Liessmann (2000)、Meier (2000) も参照のこと。
- 2) クリスチャン・マイヤーによると、ギリシャの哲学者たちは、特定の種類の労働を、とりわけ、手工業者の労働をまったく軽蔑していた。手工業者の生き方は、自由な男性にふさわしい生き方ではないと考えられていたからである。彼らは、閉ざされた空間や、日の当たらない所で活動し、女性のように青白く見え、(明らかに身体や魂を弱らせてしまう) 座ったまま仕事をしていて、友人や都市にかかわり合う時間がないとされていた (Meier 2000: 67)。マイヤーによると、当時のギリシャでは、市民階級の支配的な価値は自由にあり、自由は、可能な限り労働から自由であることと規定されていた。自由とは、自己自身のために生きることであったという (Meier 2000: 71)。また、コンツェによると、労働者という言葉に対する低い評価は、アリストテレス的な伝統につながるという (Conze 1972a: 217)。
- 3) 召命については、Conze (1972b) を参照。
- 4) エッカルト・パンコーケによると、仕事のないことの神学的な解釈は、すぐに、道徳的な次元にまで拡大したという。労働を持たない者には、ただ、現世内での証明の「機会」を拒否するという、神の不興の印が現れているだけではない。仕事のないことは、同時に、道徳的な間違いであり、とりわけ、不活発と怠惰を通じて、労働社会での証明の機会を自ら取り去ってしまうという、人間の

罪と見られてしまうのである。従って、労働をしないこと、労働を探さないことは、悪習に数えられていた。そして、悪習は、別の悪習を引き寄せるといふ罪が迫っているとされたのである(Pankoke 1990: 27)。

5) ヴェーバーのルター解釈については、さしあたって、Lehmann (1996) を参照。

[文献]

- Conze, W., 1972, "Arbeit," in O. Brunner et al. hg., *Geschichtliche Grundbegriffe, I*, Stuttgart: Klett-Cotta, 154-215. (Conze と略)
- , 1972a, "Arbeiter," O. Brunner et al. hg., *Geschichtliche Grundbegriffe, I*, Stuttgart: Klett-Cotta, 216-242.
- , 1972b, "Beruf," O. Brunner et al. hg., *Geschichtliche Grundbegriffe, I*, Stuttgart: Klett-Cotta, 490-507.
- 今村仁司, 1998, 『近代の労働観』 岩波書店.
- Lehmann, Hartmut, 1996, *Max Webers "Protestantische Ethik"*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Liessmann, K.P., 2000, "Im Schweiß deines Angesichtes," U. Beck hg., *Die Zukunft von Arbeit und Demokratie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp, 85-107.
- Meier, C., 2000, "Das Problem der Arbeit in seinen Zusammenhängen", U. Beck hg., *Die Zukunft von Arbeit und Demokratie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp, 67-84.
- Pankoke, E., 1990, *Die Arbeitsfrage*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- 清水正徳, 1982, 『働くことの意味』 岩波書店.

The Meaning of Work in Historical Contexts

SAKAMAKI, Hideaki

According to German historian Werner Conze, the word “work” historically has two different meanings: one is suffering in a passive sense; the other is an endeavor in an active sense. Originally, the passive meaning had the upper hand. From the Middle Ages on, however, the active meaning of work gradually gained popularity. This article will trace this change from the Greco-Roman era until the Reformation.

For Greek philosophers, work was suffering. They had no respect for work because it was considered unsuitable for free men with virtue. However, in the Roman era, because of the Roman agricultural tradition, there arose a notion that hard work was a legitimate path to success.

Although Greek traditions were widely accepted during early Christianity, all kinds of work came to be regarded as equal before God. If work was undertaken with prayer and consideration of God, then no type of work was considered superior to any other. Disrespect for work was partly re-established in Christian theology when Greek philosophy was reintroduced in the Middle Ages. By the time of the Reformation, however, the thought that all work was equal before God regained popularity, and work became a necessity for all. At the same time, idleness came to be regarded as a vice.

Conze stresses that Greek philosophy and Christian thought have continued to influence concepts of work through to the present day in many ways.

Keywords: work, Greek philosophy, Christianity